



 巻 頭 言

フィールド・ブルーヴン・ソフトウェア

落 合 進*

コンピュータの利用領域が拡大し、利用形態が多様化されるにつれ、それに必要なソフトウェアは膨大な生産量に達し、コンピュータ利用システムの開発費用に占めるソフトウェアの割合は10年後には90%に達するとも予想されている。従って、より合理的近代的なソフトウェア開発生産方法へ発展させる努力が、開発技術の各方面にわたって続けられている。その中で既開発のプログラムを積極的に利用することは、新たなプログラムを作るためにも、また既開発のプログラムを生かすためにも重要な課題である。

メーカーが提供するプログラムはユーザに使わせるプログラムを作っている以上、もっと広くユーザに使用されるべきであり、一部商用 TSS で提供されているような会話形式で使えるアプリケーション・パッケージなどの豊富な提供などがまず望まれる。ユーザが自分自身のために開発したプログラムにおいても同種のユーザその他にもっと利用されるようにする余地はないものだろうか。

一般の研究者や企業の利用者にとって、本来、プログラムはできれば書かずにすませたいものである。既に開発されたプログラムがあればそれを利用し、データを入れて使うというのが一番望ましい。同じプログラムを重複して作る無駄な苦勞を避け、自分は新しい部分を作るなり、より自分の目的にかなうように改善するなりしたいと考えるであろう。従ってプログラムは市場価値をもち、市場流通性をもった近代的な製品にならねばならない。

メーカーが提供するプログラムは広い使用対象をもち、かつ良く出来ていて多くの人に認められ使われているものはバグもなくなり、いわゆるフィールド・ブルーヴン・ソフトウェアとして通用し、評判と信用を得て更に使われるようになる。逆に、例えば GPSS のようなものは各社が開発してそれぞれ自社のユーザに提供しているが、この種のプログラムの中には自社の

ユーザという小さいコミュニティの中では仲々フィールド・ブルーヴン・ソフトウェアとはならない場合がある。不満な点やバグがあっても使用頻度が低ければそのメーカーは直す費用を気にする場合もあろう。しかも A 社のプログラムが良いと思っても B 社のユーザは使えない。各社のユーザが望みのメーカーのプログラムを使えたら、よいプログラムは生き残り、他は滅びて行く。となれば各ユーザがいろいろのプログラムを手軽に使ってみるようになることがよいプログラムが出来る源になるように思われる。

もちろん、そのためにはいろいろ難しい問題がある。例えば、(i) 開発者の利益や権利の保護(保障)をどうするか。あるいは企業機密や特許との関連をどうするか。(ii) ソフトウェアの商品市場をどのように形成するか。ソフトウェアの公開や登録方法、ライブラリー、相互利用上の社会的約束、ソフトウェアの価格や契約方法、等々。このような問題が解決した上で、TSS ネットの拡大やコンピュータ・ネットワークが形成されれば、ソフトウェアは市場性を持ち流通する商品となり、地域や機種を超えて手軽に使えて、大きなコミュニティの中でフィールド・ブルーヴン・ソフトウェアとなるであろう。

わが国のコンピュータ・ネットワークは各大学で同じようなメーカーのハードウェアとソフトウェアを使い、あまり特長のあるリソースができそうもないという理由でリソースの共同利用を疑問視する向きもある。これに対し、コンピュータ・ネットワークが先行しないから特長あるリソースが育たないという考え方もあり、卵が先か鶏が先かの議論のようでもある。この際、大乗的見地に立って、コンピュータ・ネットワークをナショナル・プロジェクトとして建設することができれば、わが国のソフトウェア開発・利用の面から極めて意義深いことと思われる。

(昭和51年9月29日)

* 本会理事 日本国有鉄道鉄道技術研究所